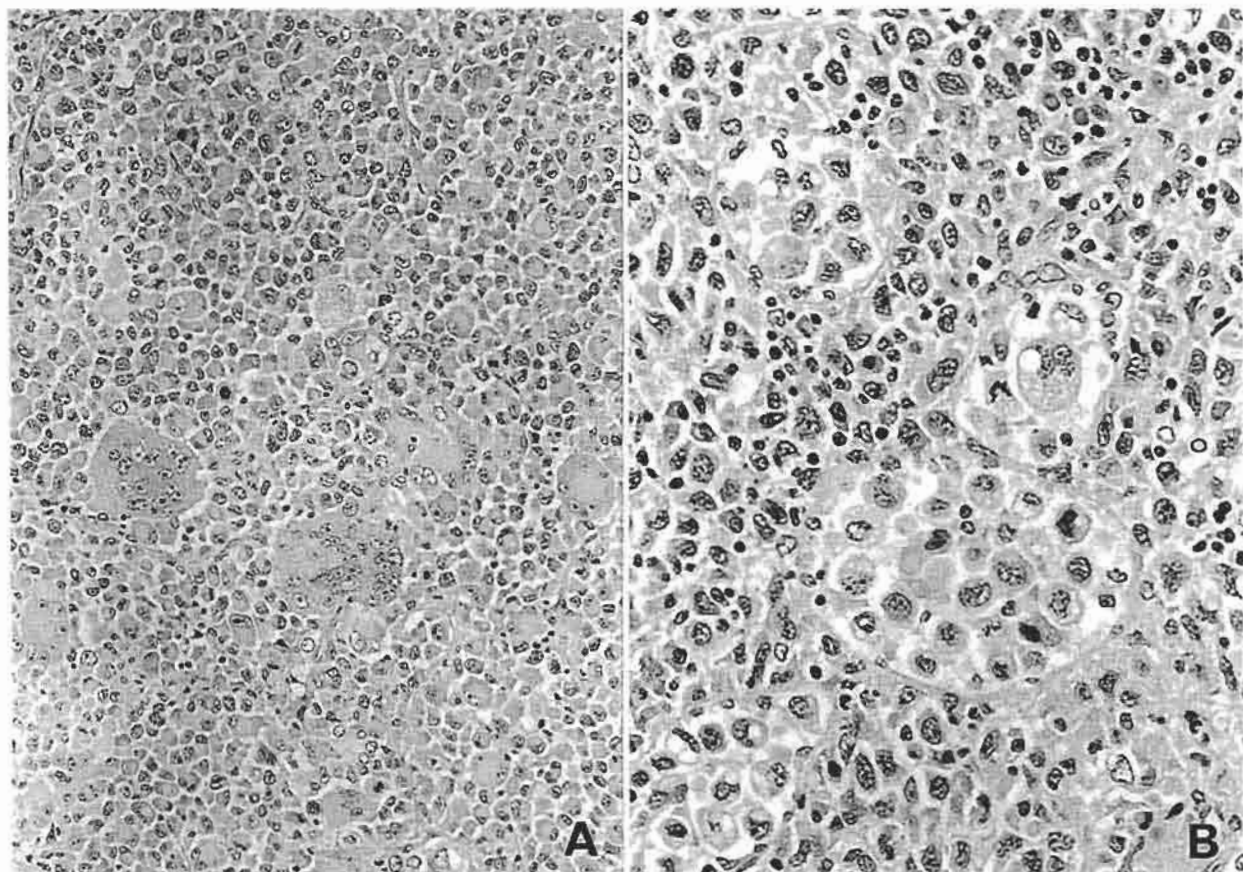


イヌの悪性組織球症（脾）

日本大学生物資源科学部獣医第二病理学教室出題 第37回獣医病理学研修会標本No.686



ロットワイラー種イヌ（雌，11歳）が突然後肢の跛行を示して来院，削瘦気味で，元気消失，食欲低下，黄疸，貧血がみられた。X線で前腹部にすり硝子様陰影，腸内ガスの尾側変位をみ，断層超音波像で腹腔内液体貯留，強度の脾腫と大小不同結節の多発が認められた。開腹により血様液（660ml）貯留，脾尾の破裂を認め，脾臓（約35×12×5cm，1.38kg）が全摘出された。脾臓の表面・断面に灰白色～乳白色の大小結節（径1～7cm）が多発していたが，肝・腎・脾など他臓器に異常は認められなかった。術後2ヶ月に全身皮膚に腫瘤が多発，X線で胸部mass陰影が認められ，やがて排尿困難に陥り腎不全で死亡したが，病理解剖はできなかった。

摘出された脾組織の大部分では，大小組織球様細胞が疎あるいはシート状密に配列し，ミトーシスが頻繁にみられた。Langhans型細胞を含む多核巨細胞が多数存在し，120個以上の核を有する径300 μ m以上

の巨大細胞もみられた(図A)。また，脾柱血管あるいは静脈洞に巨細胞を含む異型細胞が多数みられ，一部は泡沫状で相互に癒合性を示し，遊離大型細胞の一部は赤血球を貪食し，鉄反応陽性の褐色顆粒や脂肪空胞を含んでいた(図B)。増殖細胞細胞質は弱好酸性，酸性フォスファターゼ陽性で，核は大型で明るく，多くは切れ込みを有し，複数核の細胞もあり，核仁は明瞭であった。戻し電顕では，小型細胞は豊富なりボゾームと粗面小胞体を有し，ライソゾームに乏しかったが，貪食性の大型遊離細胞には多くのライソゾームや脂肪滴がみられた。接着班はみられず，核クロマチンは疎で核膜周辺部分に分散していた。細胞間に僅少の好銀線維が介在し，結節周囲には脾組織が細い带状に残存し，若干の形質細胞が浸潤していた。臨床的に皮膚その他に転移病巣もみられたことから，悪性組織球症（脾臓）と診断された。